

健康平和研究

22年第5章 ウクライナ有事

ロシアとは？ 1 新発想を 8 正反対の論調 11

22年3月15日号より

(や＝山田 学) [☆☆☆ロシアとは？☆☆☆
☆結論から申し上げますと、わたしどもは、
米国を含むNATO諸国をも、露国をも、支持
しません。日本社会から、諸民族の調和と、
諸国家そのものの止揚 (内容は保存し、形式
は否定する) を、追求してゆく、立場である
からです。ただし、この、悠久壮大な目的を、
実行してゆくためにこそ、諸国家関係の成り
ゆきは、その眞実を、正しく、把握しつづける
必要があります。

バイデン政権の米国は、いよいよ、内政の矛盾が、
激化し、さしあたり、米国世論を、外政に誘導したく、
露国を、非難対象として、利用しようとしたの
かもしれません。

ソ連崩壊直後には、NATOを東方拡張しない、
といふ、米国からの公式発言も、ありました。
しかし、露国の弱体にも乗じ、NATOは、東方
拡張された。虚偽情報まで駆使し、「民衆運動」と、
政権交代が、演出された。さうして、親米政権を
増やすことも、幾度か、実行された。直接に、
国軍などを、出動させない、(国際法に、反しない)
“スマートな”やり方、と言ひたいのでせうか。

露国と直接、国境を接する、ウクライナ国 (親米
政権) まだが、NATO加盟の話題となった。ウクライ
ナ政府と、ウクライナ東部ロシア人居住域との、
停戦合意を、先に破つたのが、ウクライナ政府
であつたことが、事実です。ウクライナ政府から、
実際、同域へ、ドローン攻撃などが、なされて
みた。米国も、それを、制止しなかつた。ただし、
この事実が、なぜか、日本社会などにて、報道
されてみません。つまり、バイデン政権は、自
国世論誘導のためにこそ、ウクライナ政府による、
露国挑発を、黙認してゐた。挑発への加担です。
バイデン大統領は、プーチン大統領と露国の、
現実が見えない、浅はかな挑発であつた。さう、
言へませう。

プーチン大統領は、“スマート”でない、“古
い”手段として、ウクライナ国への、直接の軍
事侵攻を、選んだ。露国が「民間人を、対象と
しない。」と言ふも、民間人 (とくに、子ども) に
犠牲が出たことが、より大きく報道され、国際
世論が、「露国のみを非難」へ、誘導されてゐ
ます。しかし、米国ないしNATO諸国が、直接
に、ウクライナ国へ、軍事支援するわけでも
なく、結果として、ウクライナ国の、諸施設
と、ウクライナ国民が、見殺しにされてゐると
も、言へませう。ウクライナ国は、さしあたり、
露国が要求するやう、NATO諸国と、露国の、
あひだの、緩衝地帯として、自立するしか
ない、のではないでせうか。

さて、将来の、諸民族の調和へは、健康平和
な、現実の認識としての、民族地理学が、必
須です。わたしどもは、川喜田二郎師 (1920
～2009) に、学んでをります。民族性ないし
大民族性には、成熟度、といふものがありま
す。]

(川喜田二郎『環境と人間と文明と』古今
書院1999年・39～41ページより・原文の太字部分
に__を付した。) […前近代的文明というものが
あります。本当に成熟して、パターンとして、
生きざまとして、確立した文明は、私はユーラ
シア大陸には七つしかないと考えています。こ
の七つとは、東から数えて、「中国文明」、インド半島
の「ヒンドゥー文明」、その北に「チベット文明」、
西に三つあって、ひとつは「ビザンチン文明」
(東ヨーロッパの文明)、西地中海沿岸に「ラ
テン文明」、そして最後にアルプス以北に「西
欧文明」があります。これだけです。

これは一つの考え方ですから、西の三つを
「キリスト教文明」として一括して考える考
え方もあります。しかし、実際の民衆生活と
かで考えると、たとえばビザンチンの文明と
西欧文明とは違いますね。だからここでは
分けます。

この七つの文明の特色なのですが、二つあ
げておきます。一つは、この七つの文明は
それぞれ独特のパターンを持っているので

すが、それぞれがことであろうに気候帯とわりにより一致するという事です。たとえば中国文明はある程度湿潤な暖温帯です。それよりも寒いほうにはなかなか伸びられないし、それよりも暑いほうにも本当は十分には伸びられていないのです。イスラーム文明は乾燥地帯。それもあまり北の冷涼なところまではいかない。先ほどの八五度線のあたりまでです。チベット文明は亜寒帯。ヒンドゥー文明は湿潤亜熱帯ですね、いや、湿潤というよりもサブヒューミッドだな、あれは。

「そんなバカなことがありますか」というのが多くの人の考えです。「これぞまさに環境決定論者の欠陥だ」と怒られそうな話なのです。ところが、同時にこの七文明は、みんな独自の大宗教と結びついている。俗に言う高等宗教が深く切り込んでいるわけです。中国文明の表芸はやはり儒教ですね。道教があるではないか、というのはいちよとおいておきまして、儒教です。ヒンドゥー文明は、やはりヒンドゥー教。チベット文明は、チベット型大乘仏教。イスラーム文明はいうまでもなくイスラーム教。ビザンチン文明はギリシア正教ですね。ラテン文明はカトリック。西欧文明は傾向としてはプロテスタント的。そうなのです。環境のパターン、とくに気候帯のようなパターンと文明は一致し、他方では高等宗教と結びついている。そういうことを言うと、

高等宗教を研究している人は嫌な顔をします。深遠なる高等宗教が、気候条件のごとき物的条件に左右されるはずはない。キリスト教は世界あらゆるところにある。イスラーム教もそうだし、ダライ＝ラマだって世界すべてがお釈迦さんの思想を期待している、おっしゃる。中国人だって、内心は儒教で世界征服をしてやろうと思っている。みんなそうなのである。こういったユニバーサリズムと、ことであろうに気候帯と一致するというのはけしからん。環境と一致するとは荒唐無稽である。……こういう反論がくるわけです。

イスラーム文明が暑熱乾燥と結びついていることについても、「東南アジアをご覧ください、イスラーム教が拡がっている。あそこは湿潤熱帯でしょう」と言うに決まっています。そういう例外的に見えるのはあるのです。それはこっちもよくわかっているのです。…]

(や) [で、日本や朝鮮は、どうなるのか。]

(川喜田二郎『素朴と文明』講談社1987年・45ページより) […日本や朝鮮は、文明の成熟段階まで迎えていないがゆえに、これを文明と呼ぶのはさし控えたいのである。]

(や) [このあたりの解説に、続き、今に話題の、ロシア文明については、かう、評されてゐます。続いて、東北アジアについても、言及されてゐます。]

(『環境と人間と文明と』155～158ページより)

[…ここに水界稲作民というものを中心とした、本物の文明圏ではないけれども、ポテンシャルでもう少ししたら彼らが新たな文明圏を確立するかもわからないという、未来符号がついてくる文明があるので。ユーラシアの確立した前近代的文明は七つでしたが、八つめとして、いま悪のりしているのがNIES諸国と言われているものです。これの一番ボス面をしているのが日本です。

(中略)

八番目の文明につづいて、ダークホースの文明として「ロシア文明」というものを考えてみましょう。この文明は独立して考えることができるのだろうか、ということですね。

歴史を辿ると、明らかにあれはビザンチン文明の北の出店ですね。コンスタンチノープルを中心にできたビザンチン文明の本物ではなくて、北のほうにダッシュ付になってできた。それを中心に発展したのです。しかし、本当に本心からビザンチン文明の魂まで持っているかということ、ちょっとあやしいところがあります。マージナルですから。だからすぐ浮気心で、動揺したりするのです。動揺した著名人の第一人者がピョートル大帝です。彼はビザンチンよりも、西欧文明のほうを向いてしまったのです。それで安定したのかと思うと、何か納得できないものが残りました。たとえばドスト

エフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を読んで感じるのは、西欧文明嫌いですね。ドストエフスキーそのものがそうです。「やはりそんなものは」という保留した気持ちがどこかにある。

その後、ロシアは革命で共産主義をやりました。それで安定できるのかと思ったら、やっぱりダメで、ふりだしに戻る。ソ連崩壊でふりだしに戻っている。「私たちはどちらに行けばいいのだろう」、そういうようなロシア人自身がさまよえる魂だと私は思うのです。さまよっている歴史や態度をさして、世界中がロシアをとやかく批評し、日本のインテリもけちを付けたりするけれども、考え方を変えたら面白いじゃないか。これは九番目の文明になるかもしれないということで、「さまよえるロシア人」、これを本当に居心地のよいようにすることは、世界のために、たぶんたいへん面白いプラス志向だと私は思います。

世界の文明を考えると、ちょっと問題を残すのが、東北アジアです。近代化にさしかかって、真空地帯になりました。それはどうしてでしょうか。

東北アジアは、満州族をはじめ、いくつかの民族を生み出したところですね。古いところから言えば肅慎、渤海。それから金、次は元をとばして清と、三度もあそこから乗り出してきて、中原に覇を唱えようという勢いになった。こんなあやしげな地域で

す。その魂とはどういうものであるかというのは、わかったようでよくわからない。ただ一つ言えるのは、彼らは単なる農耕民とか牧畜民とは違って、ハンターづいていう、何か狩猟民的な面白さがあります。これもダークホースのなかにひょっとしたら入るかもしれない。そういうのがここに挙げましたダークホースの文明の卵というわけです。水界稲作民、ロシア、東北アジア、これら三つに温かい目を注ぎたいというのが私の好みでございます。]

(や) [将来へ、諸民族の調和を、追求する。かういふ立場からも、今の地球情勢を、見守りたいものです。]

22.4.13.より

(や) [☆☆☆新発想を☆☆☆むろん、人道観点からは、もつてのほかだが、ウクライナ国における戦争を、むしろ、長引かせることに、利益のある、「ある勢力」も、あるのではないか。そんな気が、してきました。それに、プーチン大統領も、バイデン大統領も、ゼレンスキー大統領も、引きずられてゐるのではないか。

まづ、露国の統治体制に、一定のすき間も、あるのではないか。プーチン大統領、側近衆(ロシア正教関係者を含む)、情報機関、軍などに、一定のすき間も、あるのではないか。それで、露国が称するところの「軍事作戦」に、多くのもたつきも、生じたのではないか。

一方、ウクライナ人は、ソ連崩壊後、新しいウクライナ人意識のめざめも、あつたのかもかもしれません。だからと言って、ウクライナ人から、ロシア人へ、逆差別するとしたら、それも、問題があります。露国が「ネオナチ」などと表現してゐるのは、近年のウクライナ民族主義の、その行き過ぎの部分も、指してゐるのではないか。たとへば、ウクライナ国東部や、クリミア半島に住む、ロシア人に、ロシア語を禁止するなどは、行き過ぎではないか。

露国は、実質、統治中枢に、ロシア正教関係者が、ゐるやうです。そもそも、ロシア民族生成史にて、ウクライナといふ土地こそが、重要であつた。その史実を基礎に、今回の「軍事作戦」も、計画されたやうです。ロシア正教関係者の思想からの、影響です。一定の誤解もあるが、プーチン大統領は、共産主義・社会主義、ではない。ロシア民族主義者です。だからこそ、ソ連崩壊の、歴史的な大混乱のなかから、露国の一定の隆盛も、指導できたのでせう。実際、1917年ロシア革命の記念日、11月7日を、プーチン大統領が、露国の祝日から、はづしました。

さて、ゼレンスキー大統領の映像に接すると、政治は、演出であり、演技であるとも、感じます。ゼレンスキー大統領は、ウクライナ国東部などのロシア人自治を「認めない」と公約し、大統領となつた。米国は、いはばテレワークなどにより、ゼレンスキー大統領らを

支援し、間接参戦してゐるのではないか。
NATO諸国と、露国の、あひだに、軍事緩衝地帯を、どう創設できるか。千年以上の歴史も、踏へ、ウクライナ人と、ロシア人が、どう棲みわけできるか。
新発想の協議、新発想の安全保障が、求められてゐます。当事国だけでなく、地球全体から、協力の余地も、あるのではないか。
いづれにせよ、冒頭に言及した「ある勢力」とは、逆に、早期停戦を、強く望みます。
新発想の戦後体制。そして、破壊された、ウクライナ社会への、復興協同。とくに、純情な日本民族としては、前向きの報道にこそ、早く接したいところです。
さて、近い将来、露国は、親米政権と、なりうるか。一方、米国は、インフレや、思想混乱などにより、内政の矛盾が、より激化し、他国のことどころでは、なくなるか。前者の露国のことより、後者の米国のことが、先に来る。わたしどもは、さう、予想いたします。各種報道に、一定の偏向もあると、感じます。プーチン大統領について、まともに調査せず、「ただの狂氣」であるかのやう、煽動してゐては、かへつて、和平が遅れるばかりです。一方、「自由と民主主義を輸出する」ため、一定の暴力さへ辞さない、現実よりも観念が先行した、革命家氣分。ウクライナ国と米国の側の背景に、そんな氣分の存在も、推察されます。その観念の限界についても、考察すべし。

今までのあらゆる左翼にある、深い限界。諸民族や諸国家の、現象・構造・本質を、理解してゐない。ので、無理のない、諸民族の調和への道、諸国家の止揚への道が、観えてこない。諸民族や諸国家のあひだを、経済的に渡り歩いてきた、ユダヤ民族のやうな、視点のみからでは、対応が性急すぎ、かへつて、混乱が増える。(ロシア革命以降、現在までの、全左翼史。) マルクス、エンゲルスの学問は、かなりの部分が、正しいが、民族地理学や、国家論については、大きく不在であつた。わたしどもは、日本の川喜田二郎師と、滝村隆一師に、このことを、深く学びました。わが日本から、新発想を。]

22.5.16より

(や) [☆☆☆正反対の論調☆☆☆今月は、情報のバランスとして、今の日本マスメディアとは、正反対の論調を、引用させていただきます。船井本社『ザ・フナイ』vol.176・2022年6月より、古歩道^{フルフオード}ベンジャミン氏による指摘です。日本国に帰化したカナダ人である、古歩道氏は、そのひろく深い情報網から、いつも新鮮な指摘が、あります。100%とまでは、言はないが、わたしどもも、かなり信用してをります。]

(『ザ・フナイ』vol.176・59～62ページより)

[…今のウクライナの騒動を理解するために我々が知っておくべきいくつかの隠された事実がある。…

(中略)

…先日、ロシアのプーチン大統領が今の軍事的な動きを説明する記者会見で「現代ウクライナの領土は共産主義ロシアのボルシェビキ (ソ連共産党の前身) によってつくられた……」と、非常に興味深い事実について触れている。

まず、ウクライナの地は中世に存在したハザール王国の領地と大きく重なっている。ハザール王国とは7世紀から10世紀にかけてカスピ海の北からコーカサス、黒海沿いに栄えた遊牧民族およびその国家である。9世紀頃に支配者層がユダヤ教に改宗したことで知られていて、現在世界中に散らばるユダヤ人たちの大半は、このハザール王国の^{まつえい}末裔だ。

当時、ハザール王国は奴隷商人の国だった。東欧や中欧のスラブ人を奴隷として中東のイスラム商人に提供していたのだ。そして10世紀頃には、これに反発したロシアやモンゴルに侵攻され、消滅するに至っている。このとき、ハザール王国の支配階級はヨーロッパに逃げてアシュケナジー系ユダヤ人を名乗り、後にヨーロッパとアメリカの権力中枢を乗っ取った。これがトランプ前米大統領の登場以降に一般的に広まった「ディープ・ステート」と呼ばれる勢力である。

そして彼らは1913年にアメリカの中央銀行 (FRB) を米議会から奪い取り、そのアメ

リカの経済力を使ってロシア革命を勃発させた。歴史の事実として、ロシア革命（十月革命）を指導したレーニンやトロツキーを工作員としてロシアに派遣したのもディープ・ステートのロックフェラー一世である。つまり、かつてハザール王国を侵略したロシアに対する報復として共産革命を起こし、ロシア人を5000万人以上も殺したのだ。さらに1930年代になると、レーニン亡き後に絶大な権力を握ったスターリンによって人工的な大飢饉「ホロドモール」をソ連のウクライナ地域で引き起こしている。ハザール王国の事実上の復活のために、その地域に居住していたロシア民族を大量に餓死に追い込んだのだ。

その後、ディープ・ステートの傀儡だったスターリン率いるボルシェビキが、ポーランド、ルーマニア、ハンガリーの一部領土、さらにはロシア領のクリミアを与えてハザール王国のかつての領地に現代ウクライナをつくった。

先に取り上げたプーチンの「ウクライナはボルシェビキによってつくられた」という言葉はこのような歴史的経緯を指したものであり、この歴史が分からなければ、いまウクライナで起きていることは理解できない。

そして何より、ディープ・ステートを率いるロスチャイルドやロックフェラーの金融システムのコンピューターは、現在ウクラ

イナに置かれている。さらにはウクライナの地では生物兵器ラボの他にも武器工場や麻薬工場、人身売買組織などの犯罪拠点が展開されていて、今回のウクライナ紛争はそうしたものに対するロシア特殊部隊による攻撃という側面があった。ロシアのイタルタス通信も2月末時点で「ロシア軍が衝突しているのはウクライナ正規軍ではなくネオナチである」というプーチンの発言を大きく報じている。その言葉どおり、ロシアの特殊部隊が標的にしているのは欧米勢の息のかかったネオナチや外国人傭兵である。

しかし、ディープ・ステートはそんな事実を認めるわけにはいかない。そのため自分たちの取り締まりに動いているロシアを世界のメディアを使って一方的に非難することで悪者に仕立て、ロシアを撤退させることにより自分たちの犯罪拠点を死守しようとしているのだ。

さらに今、このタイミングでウクライナの議会が「暗号通貨取引の合法化」を決定している。この動きを推進したのは主に“ホワイト・ロック・マネジメント”というウクライナの企業だった。その代表であるセルヒー・トロン (Serhiy Tron) は「この決定により、今後は世界の暗号通貨の大部分がウクライナに集まることになる」と強気な発言をしている。そこで、その上層部の背後を調べてみるとホワイト・ロック・マ

ネジメントという会社は、やはりロスチャイルドの企業舎弟。要するに、このウクライナ議会の決定は「今後、国内の金融システムがロシアに監視されることになっても、ウクライナは暗号通貨を使って引き続き武器や麻薬、人身売買……等々のマネーロンダリング拠点として活動を続ける」と宣言しているようなものである。

その他にも、ディープ・ステートと呼ばれる権力者らが今なお悪事を企んでいることは世界中の多くの人々に知られている。しかし、9.11のときのように事件を捏造して世界人類を騙せた時代は、とっくの昔に終わっているのだ。]

(や) [ともかく今は、ものごとの真相が、わかりにくい時代です。といふより、隠されてゐた真相が、暴露され始め、古歩道氏によるこの情報誌への、連載題名の通り、『新しい時代への突入』なのです。

さて、悠久壮大な視野から、ふと、かうも、思ひました。その時代の文明と後進民族の関係について、です。古代ローマ帝国とゲルマン民族の攻防から、近・現代ドイツ社会などが、帰結したやう、現・世界経済フォーラム（ダボス会議主催）とロシア民族の攻防（今のウクライナ戦争！）から、新しいロシア社会なども、生成するか？]